

Meredith の「自然」の倫理性: Ordeal of Richard Feverel

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 作成者: 西島, 匙 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37439

Meredith の「自然」の倫理性

—Ordeal of Richard Feverel—

西 晶 匙

(I)

Meredith の意味した自然は多様性があり単に “Nature” とのみ表現されるこの語の意味をここに略述することは極めて困難であるが、彼の「自然」は少なくとも極めて強い倫理性を持っているといえる。もとより偉大な芸術観や文学観は何らかの意味でのモラルを持つ以上、彼の自然観も当然これを持つに不思議はない。従ってここに敢えてその倫理性を強調するからには、無論理由がなければならない。

私は Meredith の「自然」が浪漫主義詩人達の抱いたあの自然観と違った意味での倫理性を持つように思う。浪漫主義時代の自然は、人間とは、何といてもある間隔を置いて存在する独立の存在である。彼等の自然に対する態度はそれぞれ方法こそ異なれ、すべてこの独立した存在に自己を投射し、合一させんとする努力であった。Wordsworth が ‘Prelude’ において、彼が自然に導かれて、人間の尊敬へと入って行ったという時、そこに感ずるものは、やはり自然と人間の対置的な意識である。対置の観念を抱かずに合一の努力が成されなかったといえないだろうか。では浪漫詩人達が自己と自然とを対置的に眺めざるを得なかったという事実を、彼等の意識の中に入って考えて見ると、そこに見出せることは、少なくとも彼等にとって自然は全能の神の如きものであり、畏れ多い存在であったということではあるまいか。そうした偉大なる力、その神秘性にあこがれて自己をこれに帰一せんとする mortal な人間の魂の希求こそ、まさに浪漫的なではなかったか。自然を大きな恩恵の源泉と見た所に浪漫主義の高唱が可能であったのではなかったか。

ではそうした見方を許されなくなった時に詩人達はどんな態度を取らざるを得ないか。今日の科学時代、合理主義時代にあつて詩人は自然の恩恵面のみを見つめているわけにはいかない。彼等ばかりではない。既に浪漫主義時代の後に自然に対する価値観の転換が起っている。Hardy はパストラルな自然の一面の外に、みにくい闘争の場としての自然をも見抜いた。そしてこれを正面から描いた。自然を赤裸々な現実として先ず見つめることであった。そこには人間と自然の関係に大きな変化を生ぜずにはおかない。Meredith もこうした転換の時代に生きた人の一人である。彼もまた自然に対してかけていた浪漫主義の色眼鏡を先ず取り外さなくてはならなかった。自然は山川の風景にのみ見られる温和な或いは雄大な姿ばかりではない。むごい程に厳しい不偏性 (impartiality) を持った存在であることを率直に認める。Meredith の自然観はこの認識を踏まえて立っている。

(II)

浪漫主義時代の自然が畏敬の対象たる神に似ているといった。そしてその後のいわゆる自然主義時代の自然は神としてよりも、むしろ在るがままに自然を見ることに第一歩を置くものであった。Meredith の場合も、この自然 (Nature) を神格ではなく、人格として表現する。技術的には自然を擬人化して描いている。この擬人化を作者自身の体質的な好みとってしまえばそれ迄であるが、私はその背後に既に述べて来たような自然の価値観の転換から生ずる作者の意識を認めることが出来るように思うのである。“Ordeal of Richard Feverel *” から見出すままに例を示す。

(i) Nature is taking him to her bosom. She will speak presently.
(p. 554)

(ii) Nature, and the order of things on earth have no warmer admirer than a jolly brigand, or a young man made happy by the Jews. (p. 386)

(i) はこれに類似した例を、単に表現上から見て、Wordsworth あたりに求めることはさして困難ではないかも知れない。しかし (ii) に類する表現は到底、浪漫主義時代の詩には求めることは出来ない。この“Nature”にはモラルの臭がプンプンしている。人間の臭いをたっぷり含んだ自然がそこに感じられる。「自然の人間臭」とでも呼ぶべき点について今少し作品の中にこれを具体的に見て行きたい。

Meredith の自然に対する言及は、彼の小説においては殆んど常に或る感情的な高みに達した時になされる。これは自然の真の理解が我々が感情的なラブチュアに入り一切のことから解放される時に達成されるということであろう。自然と自己は常に相互に喚び覚まされて人間存在の意味を知らしめる。Meredith の場合、例えば自然現象と人間行動の関係は特に密接である。しかもその関係は相互に可逆的である。自己の内なるものが共感を求めてその場所を自然の風景に見出し、さらに一層、明確な意義を意識する場合と自然現象が人間の行動を決定したり示唆したりする場合とがある。我々は前者の例を“Ordeal”の第十二章に見出すことが出来る。Braize Farm における放火事件の結末近く Richard が最後の解決を与えるべく当の農場主の屋敷に入っていく場面がある。放火を計画した Richard が事の予期せぬ進展にたじろぎ不自然な工作を試みるが結局、当然の不利は免がれがたく、父 Austin に自らの過ちを認める。という。Richard が農場主の家に居る間は Austin 屋敷の外の間の中にたたずんで待つ。彼は今しがた吐いた息子の言葉に感動しているのである。傍に立ち並ぶ楡の古木を強くゆすり夜空に枯葉を吹き散らす風の音は、その時に臨んである声とある意味を Austin に伝える。

The solemn gladness of his heart gave Nature a tongue. Through the desolation flying over-head—the wailing of the Mother of plenty across the

*以下“Ordeal”と略記する。

bare-swept land—he caught intelligible signs of the beneficent order of the universe, from a heart newly confirmed in its grasp of the principle of human goodness, as manifested in the dear child who had just left him: confirmed in its belief in the ultimate Victory of good within us, without which Nature has neither music, nor meaning, and is rock, stone, tree, and nothing more. (p. 111)

この部分は Meredith の「自然」を非常に良く推察させてくれる。Sir Austin は息子 Richard と和解出来たことを喜びその喜びの中に宇宙の恵みある秩序 (beneficent order of the universe) の記しを今更に実感する。和解の喜びを更に深く究めて行く時、私はそこに息子の態度——つまり “It was my fault, Sir, I—l lied to him (Braize)—the Lier must eat his Lie.” といひ “Let me speak the truth” (p. 111) という決然たる行動の意欲——に感動し欽喜していることが判る。この態度の中に Austin は人間の善 (human goodness) の勝利を確信したのである。ここに「善」とは決して単に狭い道徳上の善を意味しない。「善」とは自然のままに生きることである。Austin が風の中にも言葉聴きとり得たのはそのためであろう。Meredith の自然観はこうした moral に支えられているのである。彼には単なる風景としての自然は一向に関心を惹かないのかも知れない。ある moral を感動的に実感しない限り、現実の自然、つまり岩や石や樹々は単なる物質以上のものでなく従って意味も調和の調べも聴き取れないのである。それは最早 Austin 個人の自然観ではない。人間一般に通ずる体験として彼は書いている。R. H. Curle によれば Meredith の作品中の人物はすべてある階級か共同体の型であるといわれるが、このことは作中の人物が自然と対した場合は特に著るしく、それは人類全体を代表する型となる*。いずれにしてもここには人間の生き方(行動)の価値認識が自然現象の中でしっかりと味わい取られているといわねばならない。

次に後者の例、即ち「自然現象が人間行動を決定する型に移りたい。この最も典型的な例は第四十六章 (Nature Speaks) にある。人間の本能を無視した父の機械主義に反撥する余り Mrs. Mount の誘惑におち入り妻たる Lucy や父親の許に帰らずに居る Richard が Rhineland の森の中で大嵐に会う。そして夫として又父親として (Richard はこの嵐の少し前に Lucy が一人の子の親となったことを耳にした) の自己の現在の位置を悟り、いさぎよく許しを求めようという勇気が湧く。

Had not god spoken to him in the tempest? Had not the finger of Heaven directed him homeward? (p. 573)

そこには最早悲劇の端緒を作り出した父親への憎しみはない。ただひたすらに自ら插いた “Wild Oat” を自らの手で刈り取らんとする自然の法則に対する謙虚なまでの決意があるのみである。すべての常識、慣習、——総じて人間社会——といった因習的なものか

* p. 8. 引用文中*の箇所参照

ら解き放たれ一人の人間として、一人の大地の子として立ち、そこに純粋な原初の感情が訪れ、その感情の中に現在の自己を判断し行動の指針を決めるのである。Curle は次のように説明している。

Touch her (=Nature) close and vital wisdom dissipates the unhappy and complicated doubts that surround us. Earth's low murmur wakes in us the responsive note of our common origin. The agonies of diseased conscience and of terror and sorrow sink away from us and the primal feelings, that long ago woke us out of darkness, come again upon us.

さて以上二つの型について自然現象と人間行動の関係を略述したのであるが、これを振り返って見る時、我々の感ずる共通点は結局、人間は自ら播いた種は刈り取らねばならないという厳しい倫理ではあるまいか。Richard が罪の意識から Lucy に対して取るべき行動を躊躇していた時、大自然が教えてくれたのも、つまるところこの倫理ではなかったろうか。自ら播いた種を刈り取るとはすべての行動は自己の責任において最後迄進められねばならないということであろう。次章ではこうした自然現象の中で得た靈感的な啓示を Meredith は如何に人間行動の実際的な規準へと近代的な知性をもって再整しているが、この点について触れて見ようと思う。しかしその前に今迄、かなり漠然と使ってきた「自然」(Nature) という言葉についてここで少し整理しておかねばならない。

前章(Ⅱ)迄に用いて来た「自然」という言葉には二つの面がある。即ち単なる我々の外にある万象、つまり風景としての自然が一つ、今一つは我々人間とこの世界を統一している実在とも呼ぶべき自然、つまり宇宙の秩序としての法則である。無論、この二つの面は Meredith にあつては殆んど断の表裏の如き関係にあり、すべて“Nature”という語で統一している。(むしろこれこそこの作家の特徴であるが。) Curle によれば我々の外部にある万象としての自然の受け取り方において、詩人には二つのタイプがある。一つは

The former see in her the sagacity of ages, and willingly realize that they themselves must be drinkers at the fountain head of her wisdom. (p. 56)

であり、他は

They do not, like the others, bring nature into their lives, but earnestly strive to merge themselves in nature. (p. 57)

である。そして前者には Meredith の如き、後者には Shelley の如きが属するという。自然を、或いは自然の知恵を自己の生活の中に容れるのが Meredith である。外界の自然をもって自己の生活規準とするということは、自ずとそこに詩的な飛躍がなければならぬと思うが、Meredith の場合、その橋渡しになるのは彼の神秘主義又は神秘的思考方法である。私はここではこうした詩的神秘主義については触れないが、彼がこうした自然に対して経験する法悦状態の重要性は“Ordeal”では p. 240 などに詳らかである。Mere-

dith は確かに神秘的直観の詩人である。彼の自然と人間の関係、宇宙の統一感の認識等はその方法において多分に神秘家である。しかし注意したいことは、この認識によって把握された人性の観察、或いは広く、世界観や人生観は極めて倫理的で近代性を帯びている。彼には風景としての自然とそこから得た行動規準というべき意味での自然との二つが存在する。そして次章においては「自然」というのは多くの場合後者のニュアンスが強いことを予め記しておきたい。

(III)

先にも触れたように自然現象の中で靈感を受けた Meredith は単にその恍惚状態にのみ停まることなく、進んでこれを人間行動の実際的な規準へと近代的な知性をもって再調整する。これは先に記した Curle の二つのタイプを考えるなら当然のことである。前章で Rhineland の森中で嵐に会った Richard の心理に触れた際に、私は嵐という自然現象の中で自ら播いた種を自ら刈り取るという勇氣を生み出した素地としての自然の意義を強調した。自然の中で経験した恍惚状態が人間を純化させた。人工的な慣習、人工的な考え方も含む——から人間を解き放ち原初の感情へと純化した。

Alone there—sole human creature among the glandeurs and mysteries of storm—he felt the representative of his kind and his spirit rose, and marched and exulted, let it be glory, let it be ruin! (p. 556)

‘let it be glory, let it be ruin’ という言葉は決して浅薄な自暴自棄の台詞ではない。一切の sophistication を脱した果の感慨である。勇氣に満ちた行動の指針はそうした無の状態に立ち帰ったところに自ずと啓示されるのではあるまいか。人間は自己のとった行動の責任をとすれば他に転嫁したり、浅薄な宿命論に陥ち入り易い。自然はそういう彼等を折に触れ時に臨んで叱咤するのである。この論理は Meredith のものである。

上述、Richard が自然から受けた啓示は実に“Ordeal”のクライマックスである。その後につづく Lucy の死が小説構成上のクライマックスとすればこれはモラル上でのクライマックスとでもいえようか。しかしこのクライマックスには極めて重要な素地がある。即ちこのクライマックスにおける Richard の心境を予知するかの如く、我々が行動する際の勇氣と決断の必要を力説する甚だ印象的な第三十三章を忘れることは出来ない。父 Austin の息子に対する愛情は、如何にして吾が子を社会の悪から守り育てるかという点に集中するが、それは、ともすれば人間の本能を無視した不自然な機械主義の独善に陥り、自我の芽生えた Richard の反感をかう。こうした時に、はからずも Richard の会った少女が Lucy という農民階級の娘であった。二人の恋は急速に進展し、英国的なカースト制度（この不自然な慣習が貴族階級と農民階級の間の結婚をはばむ）の柵を押し切っ

て、二人は遂にロンドンでひそかな結婚式を挙げることになる。ここまでに至る Meredith の筆は常に若い男女の情熱の自然な発露を描き、人工的な習慣に対して自然の優位を主張する。さて第三十三章はその結婚式をひかえた早朝の Richard について描いている。ところで、これ迄の Meredith は若々しい青春の夢を主人公に与えて来た。Austin の割一主義や、世界の不自然なカースト制度に反対して終始自然の優位を主張して来た。しかし今自然ならざるものを敵にまわして Richard が取った結婚という人生的な行動については、これまた一転して厳しい実際のモラルを持って対している。一度、決断した以上、人生はその生き方において一転する。決断という河 (Meredith はこれを Moral Acheron* と呼んでいる) を境にした人間について Meredith は

There they have dreamed: here they must act. (p. 330)

と全く厳しい。勇気をもって行動せよという。人間は弱い。責任を回避したり、安易な宿命論に逃避したりする。そうした者が何と多いことかか。

...by far the greater number of carcasses rolled by this heroic flood to its sister stream below, are those of fellows who have repented their pledge, and have tried to swim back to the banks they have blotted out. (p. 330)

この数行のもつ迫力は滔々たるアケロンの image を背後に置いて全く見事である。結婚という人間界のありふれた事象にこれ程の厳粛な迫力を持って迫る文章も多きはあまい。この文章は確かにこれ自体で立派である。これに何もつけ加えるべきでないかも知れない。しかし、にもかかわらず我々が本書の終り近く、あの嵐の中で得た Richard の心境をここに持って来て併せ考えないわけにはいかない。自分の取った行動は最後迄滅亡に男らしく追究して行くというあの心境である。

For though every man of us may be a Hero for one fatal minute, very few remain so after a day's march even. (p. 330)

このように見て来るならば、第三十三章は終末、第四十六章のあのクライマックスの伏線である。第三十三章の冒頭は、別のいい方をすれば、自然から靈感した精神の人間行動への位置づけであり理論的な再調整である。振り返って見て我々は Austin の "Scientific Humanist" としての態度と Richard の情熱的な行動のいずれに自然は位置を占めるのであろうか。ここで私は、「人間が blood (情熱) に駆られて行動を起し brain によって人生の法則を知りついに spirit によって真の力を得る*」という言葉を思い出す。そしてこの頭脳や精神は大自然の睿智であり活力であるように思う。情熱にのみ終始する行動は人間を破滅させてしまう。そこに自然の冷静な知恵が伴わねばならないのである。

*1 Acheron: In Greek & Roman mythology, the river in Hades across which Charon ferried the dead.

*2 斎藤勇「英文学史」p. 465

Obedient to Nature not her slave ;
 Her lord, if to her rigid laws he bows ;
 Her dust, if with conscience he plays knave,
 And bids the Passions on Pleasure browse....
 —The Test of Manhood

再び、自然とは、事の成行 (order of things) に従うことである。水の高きより低きに落ちる如く、雲の漂々として天空を流るる如く大自然の姿と等しい行動規準をとることであろう。人間の行動 (生き方) の中に自然を認め容れることであろう。こうした自然観は多分に東洋的である。一度、卑小な自己を去って、その上で大地の大きな動きの中に我々の行動規準を探りあてるからである。これは一見消極的な生き方と思われるかも知れないが、決してそうでない。何よりも勇氣の要る生き方である。我々は自然の中の存在であり自然の法則に影響され、さまざまな試練を受ける。しかし、それが自然より与えられるものであると知ることによって人間としての強さを身につけるのである。我等の行為がたとえ必然の法則によって生ずるとも、我々は自らこれを知るが故に自由なのである。

(IV)

最後に、以上のような自然観に導いた根本的な要因について、感じた所を簡単に述べて見たいと思う。

先にも記したように Meredith は多分に神秘的な詩人である。従って人間のもつ魂の飛躍、つまり精神的な意味での不滅性の希求というものを彼自身は重々承知していた。しかし、その反面、人間が地上に生れた限り、肉体的には決してそこから離れえない存在であることも認めていた。Meredith は人間が大地の子であることに徹し切ることを前提としてその人生観を樹立したといえまいか。彼の自然観はかくて浪漫主義詩人達と異なった意味の倫理性を帯びざるを得なかった。「大地と人間」の中で Meredith はうたう。

「よし、人間が天高く、たける嵐に
 救を叫んでも、大地の本質は拍車のみ。
 天地に向って呼ぶ人間の叫び声は逃れたい
 大地への喚きなのだ。
 他には何処へも行くところがない」

という時、我々は Meredith が肉としての人間という動かすべからざる現実をなげくのではなく、真正面からこれを認め、これと取り組んでいるように思う。そこには雄々しい覚悟がある。彼の自然観はこの覚悟の上に価値観の見事な転換を経て生ずるのではないか。地上より逃れ得ぬ人間がどのようにして生きるべきか、どうしたら眞の生を生きることが出来るか。その点から自然を見つめる。自然が人間の生き方や行動と密接な関係において見つめられる。H. Read はその著、「Phases of English Poetry」の中で自然の厳しさ

への反撥が一転して尊敬に至る 英国的自然観の特質に触れているが、Meredith もこれに似た経路をたどるのではなからうか。自然の法則から逃れ得ぬ内としての人間存在から、倫理的な自然観をうち立てた点にそれがうかがわれまいか。結局自然主義を超えた浪漫主義が Meredith のものではあるまいか。
